

人が布教師になっても困るよ」と、

静かに、ポツンと話されたのが、数ならぬ教え子、私への最後の教えになりました。

昭和四十三年六月七日 記

(京都・教法院住職)

## 松木先生を偲ぶ

灘 上 恵 教

松木先生がとう／＼亡くなられた。先には松木先生を「兄さん」と呼んでいた小松浄祐師が逝ってしまった。かゝる世とは知りながらも本当に寂しい。惜しい。ビルマの戦地で身延の夢を見るとキマツタように出てきて会ったのは両師である。人の世の不思議な縁とでもいうべきか。私が十九才で出家して身延に登り祖山学院に入った時、松木先生は天台宗大学の留学を卒えて学院の教鞭をとっていられた。その颯爽たる四十数年前のお姿が今もなつかしく臉に浮ぶ。当時の学院の雰囲気として先生と学生の間は一家の如きもので隔りなく、私もついで／＼学生らしからぬ我儘もした。しらず／＼後年の先生と私との間柄が出来上って行った。

先生のお人柄は、私には「淡々」という一語が一番よくあてはまるように思う。天台学をやられたためでもなからうが、何んだか天台風というか、禅的なような感じがする。誰にも知らさずあっさり遷化せられたが之も淡々と生き

淡々として死すという先生らしい御臨終のように思はれる。先生の御信念は身延山と生死を俱にすることではなかったか。身延に生れ、身延に生き、身延で最后を全うしたいと念願せられ、その念願を達せられた。先生の主とするところは興学と布教に在ったと思う。よく勉強し読書をせられた。一日本を読まぬと頭が馬鹿になったような気がする。とよく話されていた。その通り実行せられていた。先生は天台学をやられたので、学校でも台学を主として教えられ、「松木先生の台学」として学生は絞られていた。学校と一体不可分の重要な存在として終始せられ、教え子は全国に拡っている。念願であつた学頭にもなられ、学頭の現職で遷化せられた。しかも永年の願望であり、畢生の労をばらわれた大学高校の校舎の落成を見て逝き、新講堂で初めての大学葬が営まれたことはさぞ御満足であつたことと思ふ。

清子の雲沢寺で幼くして得度せられた時から、「自分は何んとかして立派な布教師さんに成り度い」と念願せられていたという。之れも「身延の松木上人」と呼ばれる程、全国到るところで「身延のお祖師さま」を伝え、祖廟中心の信仰を説きつゞけられた布教伝導の常精進は皆人の知るところである。

先生は極端に政治嫌いであつた。常に自分は政治に干与しないと云つて居られたし、又實際政治に関係せられなかつた。政治そのものは決していやしむべきものでなく、大事なことはよく分つていたのであるが、現実の宗政や宗政家のある面を見て、性格的にも好まれなかつたのであろう。此の考え方を通し、興学布教の一途に生きられたことも先生らしいと思う。先生は自分の信ずるところを寡言ズバリと表現し、上調子良い言動はせられなかつた。その為め時には情に欠け物足らぬように思はれ、誤解を受け損もせられた節もある。而し内には温い親切なものが脈々と流れていた。先生は学校以外に身延本山及び宗務院その他の要職も数々勤められ、夫々不績あつたことは勿論であるが、

結局身延山特に学校を中心に、「身延の松木」として身延山と凡てを一に行動し、生涯を身延山に捧げたということが出来る。先生としては自分の信ずる道、欲するところを一貫せられたわけで、「身延の松木」というにふさわしい御生涯であったと尊く思う。宗門殊に身延山に於て、かゝる師は今後余り出られぬのではないか。余程の仏縁なければ生れぬ師であったように思う。

宗門人としての生き方にはいろ／＼あろうが、先生の如きは或る意味で最も恵まれた偉なる御生涯であったと思う。「身延の松木先生」逝かれて、同窓の皆さんが、何んだか身延山に大きな穴があいたような気がすると言うのも人情としては止むを得ぬと思う。それ程松木先生は身延山の大きな存在であったことを今つく／＼と偲んでいる。

寂しい惜しい思いで一杯である。私の心の中にも現に大きく生きつづけていられる御縁を有難く思っている。先に小松浄祐師逝き、今松木本興先生を失う。今頃はさぞ霊山会上で仲の良かった伊藤日定上人も御一緒に何事かを語り合っていることであろう。たゞ感無量、謹んで増円妙道をお祈りいたします。（横浜・善行寺住職）

## 松木先生を偲ぶ

中 村 瑞 隆

普通中学を卒え師匠の計いで祖山学院高等部に入学したのは昭和八年四月のことである。そして最初の授業は松木